

2026年4月26日（復活節第4主日、A年）

メッセージ

「まことの羊飼いの声を聴くこと」

（ヨハネによる福音書10:1-10）

司祭ヨセフ太田信三

今日の福音書に登場するファリサイ派の人々は、自分たちは律法を良く知っていて、人々を裁く権利があると思っていました。今日のたとえば、羊の群れについて語られていますが、言うなれば、当時、羊たちが生きる柵の中はこのファリサイ派の人々のような者が支配する世界でした。そこは、イエスが言うように、盗んだり、屠ったり、滅ぼしたりし合う世界、人間が神に成り代わり、裁き合う世界でした。羊が裁き合う柵の中では、「ふさわしくない」とされた羊は外へと追い出され、餌を求めてさまよって生きるしかありませんでした。イエスは、そのような現実を前にして、「羊飼いは自分の羊の名を呼んで連れ出す。自分の羊をすべて連れ出すと、先頭に立っていく。」と言いました。イエスは柵から追い出された人のことを救い出すため、いや、未だ柵の中にいる人々をも救い出し、神の支配する柵の中へと導くために来られたのです。イエスのご自分のことを「門である」とも言います。イエスは人々を、イエスが門としておられる新たな囲い、イエスが羊飼いとしておられる新たな世界へと導くためにこの世に来られたのです。そのまことの羊飼いの声に聞き従うならば、人は良い羊飼いのもとの命を受ける、しかも豊かに受けることになる、とイエスは仰ったのです。

私たちが生きる今のこの世界にも、当時のファリサイ派の人々のように、「自分こそが正しい」という声が溢れ、盗んだり、屠ったり、滅ぼしたりし合っています。また、自分自身の内にも、神よりも自分が正しいとしてしまう思いがあります。そして、この世の多くの価値観、声の中で、私たちは迷い、戸惑いつつ生きています。どれが正解か分からず、時として誘惑の声に従ってしまうこともあります。しかし、イエスの声をこそ聴くことが人の生死を分けるのです。イエスはヨハネによる福音書8章で、「真理はあなたがたを自由にする」と仰っています。イエスの言葉にこそ、本当の自由が、真理があります。ならば、私たちは主の声が聴こえるように、「自分こそが正しい」「分かっている」という思いから離れ、いつも自分を開いていなければなりません。そのために祈り続け、神との対話に身を置き、真の正しさを問い続けなければなりません。

ヨハネに福音書と同じ著者のヨハネの手紙Iは、以下の言葉で終わります。

「わたしたちは知っています。わたしたちは神に属するものですが、この世全体が悪い者の支配下にあるのです。わたしたちは知っています。神の子が来て、真実な方を知る力を与えてくださいました。わたしたちは真実な方の内に、その御子イエス・キリストの内にはいるのです。この方こそ、真実の神、永遠の命です。子たちよ、偶像を避けなさい。」

私たちが偶像の声ではなく、主イエスの声をこそ聴く群れでありますように。